

文
芸
祭
合
同
作
品
集



ごあいさつ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会

会長 湯崎 英彦

「けんみん文化祭ひろしま」は、本県の豊かな自然と伝統に育まれた文化の発掘、継承、育成を図るとともに、新たなひろしま文化の創造を目指し、県民の皆様の文化活動の発表、鑑賞、交流の場として毎年開催しており、今回で34回目を迎えます。

本県では、県民の皆様一人一人が、「安心」の土台と「誇り」により夢や希望へ「挑戦」することで、それぞれの欲張りなライフスタイルを実現できるよう、さまざまな取組を進めており、「けんみん文化祭ひろしま」もその一つとして魅力のある「祭」となるよう、取り組んでおります。

今年の文芸祭にも、多くの県民の皆様から九、〇〇〇点の文芸作品を御応募いただきましたことに深く感謝申し上げます。栄えある各賞を受賞されました皆様には、心からお祝いを申し上げます。

本文芸祭が皆様の創作活動の励みとなり、一人でも多くの方々に、様々な思いを言葉に綴る楽しさを実感していただき、文芸への理解を深める契機となれば幸いです。どうか、皆様には、本県における芸術・文化の発展に、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。ごあいさつといたします。

目次

短歌

小・中・高校生の部……………8
一般の部……………22

俳句

小・中・高校生の部……………38
一般の部……………52

現代詩

小・中・高校生の部……………68
一般の部……………104

川柳

小・中学生の部……………148
高校生・一般の部……………156

作品募集要項……………166

応募状況……………168

大会記録……………169

短
歌

選
者

堀 新 石
内 宅 原
孝 道 豊
子 和 子

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

広島で世界のトップ顔合わせ叶えて欲しい核のない世界

福山市立城北中学校二年 新田 暁

広島県議会議長賞

祖父と指すはじめて勝った対局は忘れられない夏の思い出

広島城北中学校二年 大谷 心

広島県教育委員会賞

燃え落ちる線香花火暗闇に密かに光る夏のピリオド

福山市立東朋中学校二年 小林 サラ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

コロナ明けマスク外した新学期喜怒哀楽が見えるうれしさ

県立広島国泰寺高等学校二年 濱野 智輝

広島市長賞

かえるさん田んぼの中が学校だおたまじゃくしもたくさんいるよ

庄原市立高野小学校二年 井上 悠

広島市議会議長賞

帰り道ひとり神社で手を合わす父さんの癌治りますよに

広島市立船越中学校二年 上田 葵

広島市教育委員会賞

タンポポのくきをおったらのりみたいねちゃねちゃしてて手にくつついた

庄原市立高野小学校四年 藤永 美菜

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

亡き祖母が背中に触れた手思い出す触れてほしくてまた会いたくて

県立広島国泰寺高等学校二年 横山 千紗

石原 豊子 選

特
選

祖父と指すはじめて勝った対局は忘れられない夏の思い出

広島城北中学校二年 大谷 心

【評】 帰省して祖父と将棋を指すという体験。しかも強い祖父に勝ったという作者の心の成長を表現したよい歌。

水面を泳ぐ笹船追いかけた幼き日々を懐かしむ今

県立広島皆実高等学校一年 浮田 成実

【評】 笹船を浮かべて遊んだ幼き頃のこと。その周囲の諸々のことを思い出し懐かしむ作者の心を表現したよい歌。

暑い朝平和の鐘が鳴り響く八月六日の静かな時間

県立広島中央特別支援学校中学部一年 中谷 悠人

【評】 平和祈念式典の鐘の音を聞き、作者の心に広がる「平和」への思いが「静かな時間」に表現されているよい歌。

帰り道ひとり神社で手を合わす父さんの癌治りますよに

広島市立船越中学校二年 上田 葵

【評】 病身の父への深い想いが伝わる歌。そのことを友にも言えず帰り道に「ひとり神社で」に寂しさが伝わる心の歌。

姫路城桜の木々に囲まれて歴史の中に吸いこまれてく

呉市立仁方中学校二年 植田 早貴

【評】 姫路城の桜木の中に立ち、作者は姫路城の歴史への思いを「吸いこまれてく」と表現したよい歌。

一まいに心をこめたおりづるが羽をはばたき飛んでいきそう

三次市立八次小学校四年

新川 音羽

怖かった大きな音で目が覚めた今も思い出す土砂災害の夜

三原市立大和中学校二年

森貞 葵巴

ジーゼブン広島で各国代表だけでなくみんなでちかう平和な世界

呉市立蒲刈小学校五年

井上 和波

ヒロシマの晴天の空傘をさす二度はおこさぬ誓いを込めて

県立広島国泰寺高等学校二年

上原 青泉

早起きしテレビつけて式を見る家族そろって黙祷をする

比治山女子中学校二年

野田ゆらら

隣国が急に攻め込む二月末無差別攻撃散った人命

廿日市市立野坂中学校二年

浅尾 龍汰

広島で世界のトップ顔合わせ叶えて欲しい核のない世界

福山市立城北中学校二年

新田 暁

マスク焼け早く直れと気にしつつ五月の空気胸いっぱい吸う

呉市立川尻中学校二年

山田こもも

夏の夜川の近くにほたるたちぴかりぴかりと光をはなつ

三次市立八次小学校六年

家原 琉恩

宮島の花見を終えたけいだいに寄りくる鹿の頭をなでる

尾道市立向東小学校五年

山本 寛太

ゆうえんち空中ブランコくるくると目までくるくるおりののこわい

三次市立八次小学校二年

田中 颯人

帰り道黄色いひまわり咲いている元気な姿夏が始まる

福山市立駅家南中学校二年

臂 花音

爽やかな五月も過ぎて熱風が初夏を伝える午後の教室

県立広島皆実高等学校二年

成藤 万葉

病室の窓から見える紫陽花のきらめく露に暑さ忘れる

県立広島皆実高等学校一年

高松 そら

コンクール勝負が決まる十二分歓声をうむ高三の夏

呉市立呉高等学校三年

小山内美華

歩く度足元鳴らす枯れ葉の音耳にも目にもうつる彩り

呉市立呉高等学校三年

南雲 星麗

盆の墓色鮮やかな灯籠がゆらゆらゆれる広島町

呉市立呉高等学校三年

神野 七海

ふゆの朝一番乗りの教室で隙間からさす朝日染しむ

福山市立松永中学校三年

佐藤ななみ

夏祭り町が彩る不夜城でダンジリ前に心が踊る

呉市立川尻中学校二年

道上 奈香

なつのあさせみのうるさいなきごえがわたしをおこすしぜんのアラーム

英数学館小学校六年

久富さくら

新宅 道和 選

特
選

燃え落ちる線香花火暗闇に密かに光る夏のピリオド

福山市立東朋中学校二年 小林 サラ

【評】 気持ちを表す言葉は一字もないが、楽しかった夏が終わる寂しさを上手に詠った。吉田拓郎の「夏休み」の世界。

亡き祖母が背中に触れた手思ひ出す触れてほしくてまた会いたくて

県立広島国泰寺高等学校二年 横山 千紗

【評】 背中をさすってもらったその触覚と、作者の優しさが伝わってくる。おばあちゃんがあの世界で喜んでますよ。

タンポポのくきをおったらのりみたいねちやねちやしてて手にくつついた

庄原市立高野小学校四年 藤永 美菜

【評】 タンポポの茎を折ると白くて粘り汁が出る。その体験を上手に表現した。これからも体験を詠み続けてほしい。

タラのめがちくちくささるいたいなあ森にはえてるサボテンみたい

庄原市立高野小学校四年 奥田陽那太

【評】「山菜の王様」であるタラにはとげがある。その痛かった体験を素直に詠んだ。四句五句の比喩が面白い。

体育館猛暑断ち切るホイッスル優勝かけた最終決戦

呉市立川尻中学校二年 坂木 康信

【評】部活関連の短歌が多い中この短歌は特別な緊迫感が伝わってくる。「猛暑断ち切るホイッスル」が秀逸である。

ふゆの朝一番乗りの教室で隙間からさす朝日楽しむ

福山市立松永中学校三年 佐藤ななみ

夏の空ソーダのような青空が雲のアイスと混ざり合ってる

三次市立八次小学校六年 安長友里恵

夕すずみそとがすずしいきもちいい空にエアコンついてるみたい

三次市立八次小学校二年 藤田 彩乃

坂の町かはたれどきに漕ぎ登るたそがれどきの風を求めて

県立尾道北高等学校一年 津島 尖汰

想い人待てど暮らせど現れぬいつ逢えるのか神様に聞く

福山市立松永中学校三年 佐々田桃花

晴れた空大きく咲いたひまわりは太陽までも小さくみせる

東広島市立松賀中学校二年 塩村 笑愛

反抗期不意に来るこの罪悪感いつもごめんねいつもありがとう

福山市立誠之中学校二年 中山 琴心

夏休みもお母さん仕事でさびしいよたまには休んであそびに行こう

尾道市立向東小学校四年 眞鍋 亜恋

夏祭り屋台にぎわう人混みに見慣れぬ私服の君を見つける

県立尾道北高等学校一年 落合 優香

君のことずっと見てたら目が合ってバレてないかな私の気持ち

県立広島国泰寺高等学校二年 向井 陽菜

初めから好きじゃなかったあんなやつそう誤魔化した春のあの夜

県立広島皆実高等学校一年

永井 爽笑

もう八時今日はやばいと家を出てエレベーターでいったん落ち着く

県立広島国泰寺高等学校二年

山本 蒼人

コロナ明けマスク外した新学期喜怒哀楽が見えるうれしさ

県立広島国泰寺高等学校二年

濱野 智輝

大変だ帰っていたらくまを見た足音けしてしずかににげる

庄原市立高野小学校三年

前田 安紀

ゆうえんち空中ブランコくるくると目までくるくるおりののこわい

三次市立八次小学校二年

田中 颯人

あと少しそう決めてからも10分スクロールする手が止まらない

県立広島国泰寺高等学校二年

岡野 泰生

盆踊り打ち上げ花火着火してわすれたころにとび出してきた

庄原市立東小学校六年

亀井 環

考查解きけっこういけた自信あり後から気付く裏の問題

県立尾道北高等学校一年

横山 輝

友達と放課後にやる勉強は口だけ動きペン進まない

呉市立呉高等学校三年

大室 木春

早起きしテレビつけて式を見る家族そろって黙祷をする

比治山女子中学校二年

野田 ゆらら

堀内 孝子 選

特
選

広島で世界のトップ顔合わせ叶えて欲しい核のない世界

福山市立城北中学校二年 新田 暁

【評】被爆地、広島で開かれたGセブンの様子をうまく捉えている。核のない世界を叶えて欲しいとの思いが伝わってくる。

コロナ明けマスク外した新学期喜怒哀楽が見えるうれしさ

県立広島国泰寺高等学校二年 濱野 智輝

【評】コロナ禍でマスクが外せなかった学校生活。外す事ができ、みんなの表情が見えて喜びが感じられる。

かえるさん田んぼの中が学校だおたまじゃくしもたくさんいるよ

庄原市立高野小学校二年 井上 悠

【評】田んぼにかえるとおたまじゃくしをみつけ、まるで田んぼの中が学校みたいと感じた素直な気持ちが表現されている。

隣国が急に攻め込む二月末無差別攻撃散った人命

廿日市市立野坂中学校二年 浅尾 龍汰

【評】ロシアがウクライナに侵攻して二年余り、兵士、一般の多くの人が犠牲となった。悲しみが伝わる歌。

お父さん大病患い入院し涙の再会クリスマスイブ

県立尾道北高等学校一年 藤原煌乃美

【評】お父さんの長い入院。コロナ禍で面会もできない状況が続いたが、クリスマスイブにやっと再会できた喜びが伝わる。

一まいに心をこめたおりづるが羽をはばたき飛んでいきそう

三次市八次小学校四年 新川 音羽

夏が来た白く輝くセーラー服思い出すのは戦時乙女の黒いセーラー

比治山女子中学校二年 織田 萌愛

ふるさとにゆれし黄金はいずこへとかつてに思ふは亡き父の畑

県立吉田高等学校三年 高下 竜生

G7山の頂上広島に世界の平和天までとどけ

比治山女子中学校二年 隅田 沙希

帰り道ひとり神社で手を合わす父さんの癌治りますよに

広島市立船越中学校二年 上田 葵

モリアオは天ねんきねんぶつそれはね人がすむばしよこわしているから

三次市八次小学校二年 末国 晃晴

帰宅したみな寝しずまり猫だけが我をむかえる八月の夜

大竹市立玖波中学校二年 山中 理生

怖かった大きな音で目が覚めた今も思い出す土砂災害の夜

三原市立大和中学校二年 森貞 葵巴

体育館猛暑断ち切るホイッスル優勝かけた最終決戦

呉市立川尻中学校二年 坂木 康信

暑い中風鈴歌うチリチリン何故か涼しい魔法の楽器

福山市立誠之中学校二年 清水 琴音

冬隣りこの葉辿りて帰る燕一人見守る空つぼの巢

銀河学院中学校二年 小川 琴音

広島は今日も真つ赤に染まつてるカープが勝つと大もり上がり

福山市立城北中学校二年 佐竹甚乃佑

かんわされはん年ぶりに大きかへほくもうれしいそふぼのえがお

庄原市立東小学校二年 足利 昭斗

ふわふわと風にとばされしゃぼん玉きらきら光るお星さまみたい

庄原市立東小学校二年 山王 楓真

夏が来てミンミンと鳴くセミの声一週間の命の中で

尾道市立瀬戸田中学校二年 浪切 航

夏休み図書室への子らを待つ素敵な本と朝顔の花

県立広島国泰寺高等学校二年 沖田健二郎

放課後の面接練習ぬかりなし受験前夜に不安と闘う

県立西条特別支援学校高等部三年 高崎 武

盆の墓色鮮やかな灯笼がゆらゆらゆれる広島町の

呉市立呉高等学校三年 神野 七海

文化祭最後の演奏アンコール大きな拍手まだ鳴りやまず

県立広島皆実高等学校三年 叶 美羽衣

野球したいいしゅびしたぞほめられたみんなが喜ぶうれしかつたな

三次市立八次小学校三年 谷口 壮亮

一般の部

入賞

広島県知事賞

広島のゲンは裸足でかけめぐる翻訳されて世界の国を

広島市 山口 順子

広島県議会議長賞

夕ぐれは十円玉のにほひする握つて走つた駄菓子屋までを

広島市 森 ひなこ

広島県教育委員会賞

被爆者の調査といわれ友の母ジープに乗せられ連れてゆかれし

安芸高田市 井上 愛

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

雪ふりて杉の木立の暮れ早し枝を打ちては妻と呼びあう

庄原市 永宗 敏昭

広島市長賞

まだ死なん九十余歳の心意気二合の米を仕掛けて眠る

福山市 肥後 弘子

広島市議会議長賞

生かされて寄り添う時間ふえていく腎臓ひとつ無くしたけれど

広島市 岡田 郁枝

広島市教育委員会賞

亡き夫の肩の丸みがそのままの背広吊せり晩夏の日ざしに

福山市 林 スミ子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

短か日の夕餉を急かす夫は亡く歛打ちおろす暮色の畑に

三次市 林 勝子

石原 豊子 選

特選

まだ死なん九十余歳の心意気二合の米を仕掛けて眠る

福山市 肥後 弘子

【評】読み手に元気の伝わる歌。特に四句五句に作者の「まだまだ負けな
いぞ」と、意気込みが強く表れているのがよい。

亡き夫の肩の丸みがそのままの背広吊せり晩夏の日ざしに

福山市 林 スミ子

【評】亡くなられた夫を偲ぶ歌。その気持ちを「肩の丸みがそのままの背
広吊せり」と素直に表現されているのがよい。

実家消え跡地に立てばそこかしこ父母はらからの声湧いて来る

広島市 松本壽賀子

【評】実家の跡地に立ち幼きころを偲ぶ歌。四句五句の表現に作者の思い
が伝わる。特に「声湧いて来る」に強く伝わってくる。

病室のベッドに横たう父の手の握れば返すかすかな力

廿日市市 東 知佳子

【評】 病身の父への深い愛が伝わる歌。四句五句の親子の情の通い合う表現、特に「返すかすかな力」は読み手の心を打つ。

慰霊碑へ献花の首脳見学はほんの一部のヒロシマの過去

広島市 土居 直子

【評】 G7サミットの報道観ての歌と思われる。「ほんの一部のヒロシマの過去」に当時の被爆の思いを痛切に詠っている。

おふくろも親父もない故郷は心の距離が遠くかすめり

精霊船父の名ゆれる響灘こよい最後の引潮にのる

閉店の店主の挨拶貼り終へて客を迎へぬ扉を閉じる

体調を崩せしわれを気遣いて息子は雑炊の作り方を問い来る

母逝きて娘が母となる知らせあり遺影の母に報告の夏

被爆者の調査といわれ友の母ジープに乗せられ連れてゆかれし

広島は裸足でかけめぐる翻訳されて世界の国を

ただ独り残しゆく娘の頭撫で被爆の伯父の声無く逝けり

樽募金したてふ姉の仏前に十連勝を告ぐ夏の朝

沖縄の返還巡る密約を報道したる記者は逝きたり

三原市 上村 純治

福山市 富田 清人

呉市 松原 恵子

広島市 長尾 裕子

豊田郡大崎上島町 底押 悦子

安芸高田市 井上 愛

広島市 山口 順子

三次市 堂本 明美

竹原市 入駒 智子

広島市 吉川 徳子

夕ぐれは十円玉のほひする握つて走つた駄菓子屋までを

広島市 森 ひなこ

瀬戸内の平和うるわし春めくも遠いくさに心痛めり

広島市 山本 憲治

補聴器をはずせば音のなき世界なにもなくなつただに立ちおり

三次市 川崎富士子

親爺さんと親しまれし山毛櫓倒る万の抱擁受けしその幹

広島市 清水 勝子

数知れぬ犠牲のありて値上がりの卵ひとつを味はひて食ふ

福山市 高橋千恵子

つぎつぎとハードルを跳ぶ勢ひでわが子は今日の出来事を言ふ

広島市 熊谷 純

ちよつぴりを程良く思う齡なり気づけば傘寿少しが楽し

広島市 今井 徳子

雪ふりて杉の木立の暮れ早し枝を打ちては妻と呼びあう

庄原市 永宗 敏昭

陽を受けし蜜柑が風に揉まれいる樹下にて野良着の妻が手を挙ぐ

尾道市 仲尾 修

霧ひくく漂ふ野道を朝練の坊主頭の自転車がゆく

安芸郡海田町 光岡 詔子

新宅 道和 選

特
選

夕ぐれは十円玉のにはひする握つて走つた駄菓子屋までを

広島市 森 ひなこ

【評】夕方十円握り駄菓子を買に行つたのを思い出した。貧しくても幸せだった。「十円玉のにはひ」が効いている。

被爆者の調査といわれ友の母ジープに乗せられ連れてゆかれし

安芸高田市 井上 愛

【評】「ABCに原爆の効果を調べるための研究材料にされた」と多くの被爆者が証言している。まさにその現場である。

てんねんのプラネタリウムじゃねと孫は広島に無き星空を見る

三次市 藤原 郁子

【評】完璧な孫歌ですが、お孫さんの言葉が秀逸。実は「プラネタリウムの方が天然の星空みたい」なんですけどね。

広島のゲンは裸足でかけめぐる翻訳されて世界の国を

広島市 山口 順子

【評】「はだしのゲン」について諸々議論があるが、24言語に翻訳されて原爆の非人道性を世界に訴えているのも事実。

青空の下で迷子になった日の眩しさだけがまだ新しい

広島市 崎山 紗帆

【評】迷子になって呆然と空を見上げている夏帽子の昭和な女の子の映像が浮かんでくる。四句五句が良い。

入 選

ドンツドドン不意の花火に踊る胎児こどもを抱き愛いとしさ溢れくる夏

安芸郡坂町

石口 阿希

生かされて寄り添う時間ふえていく腎臓ひとつ無くしたけれど

広島市

岡田 郁枝

水仙の花のようなる笑顔して「合格したよ」と少女は告げる

庄原市

安川 博子

つぎつぎとハードルを跳ぶ勢ひでわが子は今日の出来事を言ふ

広島市

熊谷 純

霧ひくく漂ふ野道を朝練の坊主頭の自転車がゆく

安芸郡海田町

光岡 詔子

閉店の店主の挨拶貼り終へて客を迎へぬ扉を閉じる

呉市

松原 恵子

数知れぬ犠牲のありて値上がりの卵ひとつを味はひて食ぶ

福山市

高橋千恵子

親爺さんと親しまれるし山毛櫓倒る万の抱擁受けしその幹

広島市

清水 勝子

用水路のごみに掛かりてくるくとペットボトルは海にも行けず

福山市

高橋 泰子

厨辺の明かりやさしや風邪癒えし母が小さくおかわりを言う

広島市

高野 和子

雪ふりて杉の木立の暮れ早し枝を打ちては妻と呼びあう

後家さんと呼ばれて生きし戦後なり呼ばれぬ名前戒名の一字

「お母さん痒いところはないんかね」墓の背を洗そびらいつつ聞く

急くときはレジの並びを見比べて若者多き列に連なる

差す光波打つプール水しぶき子の歓声がりフレインする

巢立ちせしコウノトリ一羽山里の夕なずむ頃日毎まみえり

短か日の夕餉を急かす夫は亡く鋏打ちおろす暮色の畑に

遠雷は近づくことなく消え去りてこの夏子らは帰省せざりき

猪も食わねばならず百姓は食われてならず戦いつづく

あけぼのの天空にある下弦の月やわらかき光が私を包む

庄原市 永宗 敏昭

福山市 小林 加悦

広島市 岩本 幸久

広島市 小坂 修

庄原市 古家八千代

福山市 土屋 純子

三次市 林 勝子

広島市 岡田 寿子

三次市 真丸 利子

広島市 大本タツ子

堀内 孝子 選

特
選

短か日の夕餉を急かす夫は亡く鋤打ちおろす暮色の畑に

三次市 林 勝子

【評】夕迫るなか、一人で畑を耕している作者。「夫はなく鋤打ちおろす」に寂しさと前向きに生きる姿が感じられる。

コロナ禍をさすがに鴉「鳴いてゐます飛んでゐます」と見せてあつぱれ

広島市 三浦 恭子

【評】コロナ禍の中、自粛の人間とは関係なく、鴉の目線で詠まれた発想が面白い。「見せてあつぱれ」が効いている。

広島のゲンは裸足でかけめぐる翻訳されて世界の国を

広島市 山口 順子

【評】平和教材で使用された「はだしのゲン」これからは世界中の人が読んで平和になってほしいとの願いが込められている。

生かされて寄り添う時間ふえていく腎臓ひとつ無くしたけれど

広島市 岡田 郁枝

【評】病を乗り越えて互いに寄り添い、生きる姿が伝わってくる。「腎臓ひとつ無くしたけれど」に、心打たれる。

雪ふりて杉の木立の暮れ早し枝を打ちては妻と呼びあう

庄原市 永宗 敏昭

【評】厳しい杉の枝打ち作業。雪が降る中、お互いの状況を確認するよう
に「妻と呼びあう」に二人の気遣いが伝わってくる。

実家消え跡地に立てばそこかしこ父母はらからの声湧いて来る

まだ死なん九十余歳の心意気二合の米を仕掛けて眠る

無言館の妊る裸婦を描きしは征く画学生の遺す恋文

疎開先き母影追いし夕間ぐれ八十路過ぎしも鳩鳴けば恋う

ドンツドドン不意の花火に踊る胎児こを抱き愛いとしさ溢れくる夏

引き揚げの最後の難関釜山港を離れる宵の一番星

閉店の店主の挨拶貼り終へて客を迎へぬ扉を閉じる

亡き夫の肩の丸みがそのままの背広吊せり晩夏の日ざしに

数知れぬ犠牲のありて値上がりの卵ひとつを味はひて食ぶ

蜜月の人生キック五十年まだまだ続く人生ゴール

広島市 松本壽賀子

福山市 肥後 弘子

尾道市 久保 ヒデ

広島市 恵 風

安芸郡坂町 石口 阿希

広島市 中垣 悦子

呉市 松原 恵子

福山市 林 スミ子

福山市 高橋千恵子

広島市 村上 中

慰霊碑へ献花の首脳見学はほんの一部のヒロシマの過去

広島市 土居 直子

若者が集うこの街近頃は介護グッズの店多くなり

広島市 魚山 玉江

精霊船父の名ゆれる響灘こよい最後の引潮にのる

福山市 富田 清人

被爆者の調査といわれ友の母ジープに乗せられ連れてゆかれし

安芸高田市 井上 愛

ただ独り残しゆく娘の頭撫で被爆の伯父の声無く逝けり

三次市 堂本 明美

夕ぐれは十円玉のほひする握つて走つた駄菓子屋までを

広島市 森 ひなこ

コウノトリ希羅里・羅羅・喜羅名親いて世羅の町にはこども増えたり

広島市 兼池 隆子

つぎつぎとハードルを跳ぶ勢ひでわが子は今日の出来事を言ふ

広島市 熊谷 純

炎天下ノート片手に立ちすくむ語り部たちの被爆体験

広島市 三谷 俊明

つつしみて読む「夏の花」ヒロシマの八月六日空はれわたる

呉市 古谷 明子

俳
句

選
者

広 木 川
川 村 崎
良 里 益
子 風 太
子 子 郎

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

水鉄砲相手の心ねらいうち

廿日市市立佐方小学校五年 中野 昇馬

広島県議会議長賞

桜貝自然が生んだ美しさ

広島市立中山小学校六年 香取 碧

広島県教育委員会賞

氷水とけてもとけぬ一問目

県立呉商業高等学校三年 井上 心彩

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

さくらちりその向こうには校門だ

廿日市市立佐方小学校五年 山下 栞

広島市長賞

告白まえ螺旋階段汗にじむ

県立呉商業高等学校一年 西岡 丈志

広島市議会議長賞

父の日に安いハンカチプレゼント

廿日市市立佐方小学校五年 山下 瑛都

広島市教育委員会賞

花火より耳に残るは君の下駄

広島市立瀬野川中学校三年 小林 美結

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

夏空や一〇〇メートルを駆け抜ける

広島市立瀬野川中学校三年 松岡 潤也

川崎益太郎 選

特選

登下校皆の片手に扇風機

広島市立船越中学校三年 大川 航平

【評】異常な暑さが続く中、手に持つ扇風機が若者の間で、爆発的に大流行。時代を捉え、上手く俳句に仕上げた。

彼岸花毒をもったおひめ様

府中町立府中小学校三年 中村 楓香

【評】彼岸花に毒は、知られているが、それを姫に見たてたことに感銘。中六の字足らずが残念で、二位と劣後させた。

赤とんぼかわいいけれどふしあわせ

廿日市市立佐方小学校三年 和田 光以

【評】群れ飛んでいる赤とんぼを、不幸せと感じた斬新な感性に驚いた。言われてみれば、そうかもと納得させられた。

花火より耳に残るは君の下駄

広島市立瀬野川中学校三年 小林 美結

【評】「恋は盲目」というが、初めて見た彼女の下駄履き姿に、ますます恋心が燃え上がったという切ない句。その後は。

氷水とけてもとけぬ一問目

県立呉商業高等学校三年 井上 心彩

【評】かき氷は、溶けても問題は解けないという、学生らしい悩みを、リフレインを使って、面白く表現した句。

入
選

久しぶりマスクはずせる夏休み

比治山女子中学校二年 渡辺 実彩

ランドセル鉄板ぐらい暑すぎる

坂町立横浜小学校五年 波田 典惺

うちわ捨て予算見て買う最新機

県立吉田高等学校二年 中元 悠斗

彼岸花嫌い嫌われ愛される

東広島市立向陽中学校三年 中村 心

そのままはそらからできたまめなのか

大竹市立大竹小学校四年 柳井 桃汰

出番だぞ！納められてた扇風機

県立広島皆実高等学校三年 中村 樹

見れたけど願いが言えない流れ星

福山市立誠之中学校三年 平田 未来

とんぼの目おっこちてきたためずらしい

海田町立海田小学校二年 松野 壮真

桜貝自然が生んだ美しさ

広島市立中山小学校六年 香取 碧

さくらんぼ君とすごした甘い恋

福山市立誠之中学校三年 木之下 さら

受験生全国敵に本開く

呉市立呉高等学校二年 冲原 心実

彼岸花毒があるから気をつけて

府中町立府中小学校二年 山形 瑛登

散らないで金木犀と僕の恋

福山市立誠之中学校三年 立石 美月

本を読みめぐりめぐられ扇風機

広島市立船越中学校三年 岡本 大明

風船がぼくの未来を映してる

大竹市立大竹小学校六年 三浦 翔大

人混みでかすむあなたは朧月

福山市立駅前中学校三年 藤原 絢香

雷が怒って空を光らせる

廿日市市立佐方小学校五年 平川 麻也

梅雨の中忘れた傘が罪深い

県立呉商業高等学校一年 佐川 琉也

ピチピチと舌がちくちくサイダーだ

坂町立横浜小学校四年 高橋 美優

雷はこわいもこえてきれいだな

廿日市市立佐方小学校五年 多原 美羽

木村里風子 選

特
選

父の日に安いハンカチプレゼント

廿日市市立佐方小学校五年 山下 瑛都

【評】父の日にハンカチをプレゼントしたが父には安いとは言わない。子の父を親う気持が一枚のハンカチにある。

告白まえ螺旋階段汗にじむ

県立呉商業高等学校一年 西岡 丈志

【評】心理的である。何を告白するのか、その気持が分かる。

釣り終えて海面に映る夕日かな

県立尾道北高等学校一年 上本 周和

【評】釣りに満足している。釣果よりも、自然の美しさにも満足している。たのしい一日の終り。

俳 句 部 門

さくら散る別れが近づく帰り道

県立呉商業高等学校三年 西本 百花

紺碧の二つ並んだラムネ瓶

県立尾道北高等学校一年 菅原こはる

学び舎へ胸が高鳴る春一番

東広島市立豊栄中学校三年 加藤 徹哉

狼の毛皮のごとく闇夜かな

東広島市立向陽中学校三年 加藤 蒼唯

赤とんぼ夕日といっしょにおよいでる

大竹市立大竹小学校四年 佐々木翠柚

あめんぼは水にかぶよ上手にね

廿日市市立佐方小学校二年 かしまよしなり

田植えしてどろんこになりわらい合う

廿日市市立佐方小学校五年 水津 咲花

海にはね小さい魚泳いでる

海田町立海田小学校三年 藤原 明咲

夕焼けの空の色はほほの色

海田町立海田小学校五年 今田 啓翔

夜が明けて庭の方から鳥の声

海田町立海田小学校五年 岩口 小春

夏休みじいちゃんとおえてうれしいな

海田町立海田小学校六年 俵 絆理

風りんの音で静かにすごす夜

坂町立横浜小学校六年 高橋 優空

赤とんぼなんで赤なのふしぎだね

府中町立府中小学校二年 中林 知輝

風りんに風がないから手でならす

福山市立千田小学校三年 田邊 智稀

水鉄砲相手の心ねらいうち

廿日市市立佐方小学校五年 中野 昇馬

桜貝自然が生んだ美しさ

広島市立中山小学校六年 香取 碧

ただいまとドアを開けると蚊が入る

大竹市立大竹小学校六年 野中 勇己

太陽が雲海の中かくれんぼ

府中市立上下北小学校五年 池田 雪乃

広川 良子 選

特
選

さくらちりその向こうには校門だ

廿日市市立佐方小学校五年 山下 栞

【評】満開の桜が散ったあとの空間に通いなれた、見なれた校門が大きく現われた。いかにも学校の桜が散った実景実感。

夏空や一〇〇メートルを駆け抜ける

広島市立瀬野川中学校三年 松岡 潤也

【評】真夏の太陽のざらざら照りつける下、一気に百メートルを駆け抜けた若さと活力が感じられる。今年の猛暑は格別。

夏課題明日明日と積もる山

呉市立呉高等学校二年 福迫 将真

【評】夏休みの終わりころまで呑気に遊んでいたが、ふと先にのばしていた宿題に気づき、慌てふためいている自画像。

影濡れて屋根の向こうに見える虹

呉市立呉高等学校三年 川崎 真綾

【評】雨が止んだばかりの空を見上げると、大きな虹が屋根をつつみこむように輝やいている。雨上がりの不思議な光景。

水鉄砲相手の心ねらいうち

廿日市市立佐方小学校五年 中野 昇馬

【評】水鉄砲にも駆引きがあるのだ。油断も隙も無くたくらみ通りねらいうったとは気持ちよからう。

祖母の目を盗み三つ四つひなあられ

福山市立駅家中学校三年 藤原 愛理

夕立が赤子のように泣きわめく

大竹市立玖波中学校三年 金行 信一

ボランティア母と一緒に汗流し

府中町立府中小学校五年 品川 美幸

七五三なれないはかまはずかしい

広島市立中山小学校五年 木村 悠駕

炎天下勝利の校歌を響せる

県立尾道北高等学校一年 寅尾 遥翔

はやくして買ったアイスが溶けるから

福山市立東朋中学校三年 穂積あかり

さくらんぼ双子の姉妹育ってる

大竹市立大竹小学校六年 安川 巴

バチバチとせんこう花火たいけつだ

広島市立原南小学校五年 川本 柚美

飛びたいなつばめのように空高く

大竹市立大竹小学校四年 嶋田 光志

さざ波の白に隠れたミズクラゲ

県立尾道北高等学校一年 森数 俊輔

こいのぼり泳いでいると空が海

廿日市市立佐方小学校四年 西澤 沙耶

みつばちは黄色のもようかっこいい

廿日市市立佐方小学校四年 伊藤はびへ

甲虫自慢の角にてきはなし

三次市立作木小学校六年 堀江 陽仁

火のように真つ赤に咲くよ彼岸花

府中町立府中小学校三年 池田 美春

みのむしが木にぶらさがり落ちそうだ

府中町立府中小学校二年 清水 耀莉

カワセミがきれいな川をとびまわる

海田町立海田小学校五年 本郷 佑來

風鈴の音ペンに乗せ手紙書く

庄原市立庄原中学校三年 松代 笑佳

また一步僕の記録が残る冬

東広島市立向陽中学校三年 谷口 宙音

夏休みしわしわになる単語帳

呉市立呉高等学校三年 土手 美咲

七夕に願い叶わず追試あり

県立尾道北高等学校一年 角田 莉緒

一般の部

入賞

広島県知事賞

流れ星神のおはじきはじまりぬ

広島市 梶原美江子

広島県議会議長賞

噴水やをさなき嘘にだまさるる

広島市 熊谷 純

広島県教育委員会賞

代田搔く一筆書きのように搔く

福山市 瀬尾ちとみ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

初春や百寿の母の薄化粧

福山市 宮本 昭信

広島市長賞

山からの水たつぷりと植田かな

広島市 松田 郁子

広島市議会議長賞

虹たてば母のかけらを探しをり

東広島市 河上多美子

広島市教育委員会賞

大空に大あばれして鯉のぼり

広島市 五藤 京子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

麦秋やふるさと近き橋渡る

呉市 西原 久子

川崎益太郎 選

特選

虹たてば母のかけらを探しをり

東広島市 河上多美子

【評】虹と母との取り合せ。〈かけら〉としたことが斬新。一見不謹慎にも見える言葉に、母に対する深い愛情が読める。

噴水やをさなき嘘にだまさるる

広島市 熊谷 純

【評】噴水と嘘の取り合せ。〈をさなき嘘〉が、幼稚な嘘か、幼子の嘘か、両方に読めて面白い句。最後は水に流そう。

天敵のスリッパかわす御器かぶり

広島市 関 秀美

【評】スリッパを天敵と見立てたことが上手い。「ごきぶり」でなく〈御器かぶり〉した俳味。とにかく、面白い句。

初春や百寿の母の薄化粧

福山市 宮本 昭信

【評】初春・百寿・薄化粧の三つの取り合せ。長くゆったり流れた親子の歴史が見え、これからも続く幸せに乾杯。

此の年で素直になれぬねじり花

広島市 久米 美枝

【評】「三つ子の魂百まで」の諺を裏に詠んだ句。これも個性と開き直っている作者が見える。これからもこのままで。

入
選

この星は永久に続くか麦熟るる

東広島市 香川不可止

わが病父母に愚痴愚痴墓参り

広島市 石原千代子

流れ星神のおはじきはじまりぬ

広島市 梶原美江子

ひとつ脱ぎまたひとつ脱ぐ夏衣

広島市 林 たかし

爪痕の余りに深き梅雨出水

東広島市 山田美佐子

思ひ出は身勝手でいい青葡萄

福山市 栗本 リカ

父の日の心の中の父の顔

広島市 小玉 敬子

凜乎たるこども代表広島忌

広島市 鷺見 葦月

束の間の昼寝貪る厨妻

尾道市 浜本真知子

清貧や虹を映して潦

尾道市 前中 吾一

代田搔く一筆書きのように搔く

福山市 瀬尾ちとみ

紅をさし遠退く吾子や七変化

呉市 藤本 卓昭

「なんでこうなるの」連呼の二才夏

山県郡安芸太田町 齊藤たえ子

フラガール素足の爪は海の青

福山市 井上 芳香

過疎村の案山子も後期高齢者

廿日市市 栗屋 治

桜蕊降る甲骨文字の形して

尾道市 砂田 千春

白雨きて乏しき村を洗ひ去る

庄原市 稲垣サカエ

頼りなき勘を頼りの西瓜割り

広島市 天王 省治

ひと言の足らずを悔いる葱坊主

福山市 高橋 泰女

見上げれば空を突き刺す立葵

広島市 中越 麻悠

木村里風子 選

特選

麦秋やふるさと近き橋渡る

呉市 西原 久子

【評】麦秋とは、麦の取り入れどきであり初夏のころにふるさとに向かう。なつかしい橋であり渡ると故郷である。

山頭火真似て旅立つ夏休み

広島市 寺澤 紀子

【評】山頭火は理由あつて放浪の俳人。自由気儘な旅をした。その気分で作者は旅に出た。

草笛の中に亡き友山河あり

広島市 大林 實

【評】草笛を吹く、亡き友と過した故郷の山河は目の前にあるのである。友の姿が目の前の山河と共にある。

代田搔く一筆書きのように搔く

福山市 瀬尾ちとみ

【評】代田を搔く、田植え前の準備であるが一筆書きとは言い得て妙。作業をしている姿が見える。

釣り人へ釣り好きの寄り秋日和

福山市 田村祐巳子

【評】釣り好きの人の心理が如実に出ている。釣りをしていると寄って声をかけたくなるのである。

入 選

散華とは仏教用語敗戦忌

福山市 肥後 弘子

主なき家の風鈴澄み渡り

江田島市 盛中千代子

山からの水たつぷりと植田かな

広島市 松田 郁子

山積みの蛸壺の待つ帰省かな

安芸郡府中町 大久保信子

うら返し使ふ雑布夕かなかな

広島市 川手 和枝

筆立に使はぬ絵筆水中花

福山市 池田 律子

峡にまた一つともしび消えて秋

三次市 林 勝子

白寿たる傷痕軍人終戦日

広島市 松尾 信彦

蝌蚪の世も一期一会のありにけり

福山市 甲斐 照美

曼珠沙華休耕田の畦を染め

広島市 國本 和子

桜まじ茶室の草履裏返る

廿日市市 辻 惠風

紫陽花をひとこと誉めて登校児

広島市 村本クニ子

夏草の荒田に山羊の親子連

福山市 田口 公子

春暁や寄せ来る波の大鳥居

広島市 種村 明雄

子燕の喉は真つ黒蔵座敷

福山市 林 万理子

噴水やをさなき嘘にだまさるる

広島市 熊谷 純

船泊る瀬戸内のどかに夕映えり

広島市 山本 憲治

盆踊り囃を聞けば手が動く

江田島市 山本 光

線香花火八つもならば膝小僧

広島市 星加 鷹彦

初春や百寿の母の薄化粧

福山市 宮本 昭信

広川 良子 選

特選

大空に大あばれして鯉のぼり

広島市 五藤 京子

【評】 思い切り空を泳いでいる鯉幟。祝われて見上げている子どもの元気までが伝わってくる。あばれているが面白い。

流れ星神のおはじきはじまりぬ

広島市 梶原美江子

【評】 正に天帝のおはじき。流れ星のきらきらを神が細螺を撒き散らして遊ばれている。流れ星のこの上ない絶妙な詠いぶり。

寂しさに一灯欲しき木下闇

福山市 嶋山 洋子

【評】 霊気漂う深閑とした森。昼なお暗くひとりでは不気味である。こんな場所にこそ一灯欲しいとは、誰しもの思い。

溝浚へ軍手のままの指図の手

呉市 伊藤千賀子

【評】軍手を外す余裕もなく、長老の堂々とした差配に、滞りなく歩った
溝掃除。

今日はねと孫に教える盆の月

広島市 福永 將來

【評】どんなことを孫に伝えたのだろうか。きつとご先祖さまのこと。お
じいさんのこと。やさしい祖母の声が聞こえる。

入 選

永き日や還暦過ぎて弾くピアノ

広島市 百合香

線香花火八つもならば膝小僧

広島市 星加 鷹彦

花吹雪百一歳の店仕舞い

広島市 紗藍 愛

山からの水たつぷりと植田かな

広島市 松田 郁子

白寿たる傷痕軍人終戦日

広島市 松尾 信彦

父の日や呉れしTシャツ着ては脱ぎ

福山市 村上 仁

百歳の語り尽くせぬ震災忌

福山市 檜崎喜美枝

風鈴の音色さびしい南部鉄

広島市 吉川 徳子

山積みの蛸壺の待つ帰省かな

安芸郡府中町 大久保信子

菜を洗ふ指がたのしげ夏に入る

竹原市 前田美木枝

碁敵の一手に汗を絞りけり

広島市 徳毛 佳美

夏草の荒田に山羊の親子連

福山市 田口 公子

マスクして顔半分の自己紹介

広島市 山口 順子

風鈴に目覚めし午後のだるさかな

江田島市 通堂 泰子

海鳴りの余韻にすぎる暮の春

福山市 藤井 茂基

爪痕の余りに深き梅雨出水

東広島市 山田美佐子

一服に外すエプロン合歡の花

東広島市 森川 慶子

束の間の昼寝貪る厨妻

尾道市 浜本真知子

終の家に郭公一日鳴きにけり

福山市 高橋千恵子

写経足し苧殻一束焚きにけり

福山市 小林 洋子

現代詩

選
者

村 橋 木
澤 塚
彰 し 康
彦 の ぶ 成

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

拝啓、雨

県立府中高等学校二年 村上 実緒

拝啓

君が降る前のアスファルトの匂いがします
今にも泣きそうな空いっぱい
の君を見えています

君はどれだけ涙をのんでいるのですか

天にいる君の涙を地上の人間は

邪魔だと言わんばかりに傘で拒絶する

もし私までそうしてしまつたら

君はさらに悲しみを抑えられなくなるのでしょうか

悲しみを抑えられなくなった君は

ついに人々に涙を訴えかけ

地上にいる人々は

気だるそうに乾きかけの洗濯物を取り込む

悲しみは誰にも受け取ってもらえないまま

君は涙を流し続けるのですね

人間は止まることのない君の悲しみを「梅雨」と呼び

まだ降るのかと俯く

人間は笑顔でいる君が涙を流すのを「天泣」と呼び

珍しいと見つめる

人間も同じなのです

誰も受け止めてはくれない悲しさ

誰も気付いてはくれない寂しさ

人間も君も悲しみは似ているのですね

敬具

広島県議会議長賞

わたしのからだ

わたしのあしは
ちいさくて
わたしのあしは
おおきくて
わたしのあしは
おそくて
わたしのあしは
はやくて
わたしのあしは
ふとくて
わたしのあしは
ほそくて
わたしのしんぞうは
ちいさくて
わたしのしんぞうは
おおきくて
わたしのては

庄原市立比和中学校二年 白根 晟治

ちいさくて
わたしのては
おおきくて
わたしのころは
つめたくて
わたしのころは
あたたかい
ここにはいろんなわたしがいる
つぎのわたしにであうとき
どんなわたしになっているのか

広島県教育委員会賞

わたしの名前をおしえてください

広島市立千田小学校四年 橋本 知春

わたしは
おまつりの中の にんきもの

だれか

わたしの名前というもの
おしえてください

わたしがいるのは水の上

きょうは

今年でいちばんあつい日
だから

おふろにつかっているみたい

わたしは水色水玉もよう

いろんな色の なかまたち

大きななかまや小さななかま

いろんなかまとすんでるよ

たまになかまが

きよじんにね

つりあげられたり

しちゃうんだ

そしてわたしも

つりあげられそう

目をしゅうちゅうさせ

わっかにおし

いきおいよくあげられた

みんなさよなら おげんきで

そのあときよじんは

ヒュルルル ポン

ヒュルルル ポン

上下下とふりまわす

あたまがくるってしまいそう

あつさにたえれずわたしはね
もうすこしではれつしそう

だれか

わたしの名前というもの
おしえてください

するときよじんが言ったんだ

「ヨーヨーとれてうれしかったね」

そうなんだ

わたしの名前は
ヨーヨーなんだ！

パンとなる時水もちり
それはわたしの おわりなの

現 代 詩 部 門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

ぼくの友だち

圭ちゃん どうしてたんだよ

おそいじゃないか

いつも

ぼくより先に来てるじゃないかよ

どうして

今日は

ぼくが来た時

いなかっただよ

どうしたんだよ 圭ちゃん

どうしてたんだよ 圭ちゃん

ぼくは 圭ちゃんがいなくて

心配したんだよ

圭ちゃんが いなくて

がっかりしたんだよ

圭ちゃん!!

圭ちゃん!!

ぼくは 圭ちゃんとみんなに会えて

呉市立蒲刈小学校六年 木村 圭介

毎日 楽しいんだよ
圭ちゃんが いない学校
おもしろくないんだよ
そうなんだよ

どうしたんだい 圭ちゃん
どうしたんだい 圭ちゃん

……

みんなに言われた

ぼくは…

ぼくの足をむかでが歩いたんだよ

びっくりして

超 びっくりして

むかでを はらったら

むかでが首のところへ来て

パニックになったんだよ

どれどれ 晃ちゃんが

ぼくの首のところをのぞいた

どれどれ

どれどれ

もう おしくらまんじゅうじゃん

圭ちゃん

むかでないよ

大丈夫 大丈夫

よかった

よかった よかった

拍手かっさいしてくれた

現 代 詩 部 門

広島市長賞

甲子園

英数学館中学校二年 桐山 昂大

昔は坊主頭ばかり
今は坊主頭じゃない人も
昔とは変わったねとお母さん
昔と今が違って何が悪い？
坊主だったら何が悪い？
髪が長いと何が悪い？
髪が長いと何が悪い？
坊主だったら何が悪い？
髪型で野球をするわけじゃない
みんな野球が好きだから
ただそれだけ
髪型なんて関係ない
みんな目指してやっている
ただそれだけ
髪型なんて関係ない
この平和な日本で
野球ができることこそが幸せ

ただそれだけ
戦争で野球ができなかった人達は
髪型論争に何を思う？
そんな小つちやなことをと
ただ笑うだけ？
僕の印象に残ったのは
髪型じゃなく
がんばっている高校球児
ダイヤのように光る汗と涙
ただそれだけ

広島市議会議長賞

かわいい妹

お姉ちゃん

だっこしてあげる

いいよ

ぎゅっと体をだきしめる

でも 私の体はあがらない

ありがとう 上手にだっこ

できたね

今日は 夜神楽

みこ舞の発表

練習の成果を出すぞ：

お姉ちゃん がんばれ

お姉ちゃん がんばれ

オー オー ガオー

ワー ワー アー アー

お父さんのむねにしがみつく
足をばたつかせ ばたつかせ

呉市立蒲刈小学校五年 川本 紗楽

お父さんの体を

ものすごいはやさで

よじのぼっていく

よじのぼっていく

こわさマックス

よじのぼって さけんでる

(こわいよ) ワー

(こわいよ) ワー……

大丈夫だよ

そのおにさん

ともだちの お父さん

病気やけがからまりんを守るため

オー オー ガオーつて

さけんでくれてる

大丈夫

大丈夫

私もまりんを

守ってあげる

オー オー

ガオー

広島市教育委員会賞

共有

にっこり笑うと

にっこり笑う

そして二人で笑い合う

好きになる人形も

好きな食べ物も同じ

だから

私は、ダブルのかおと

楽しいこと おもしろいこと

物も笑顔も

共有

笑顔も

二倍 二倍 時には家族、友達が 数百倍の

幸せ うれしさ 楽しさにしてくれる

ある日とつ然

一発のばくだんが ある町に落ちた

遊びも 笑顔も 喜びも

食事も 家族も 家も 町も

呉市立蒲刈小学校六年 石原 実織

こわれて 何もなくなった
命を守るために逃げる
命をうばうためにばく弾を放つ
放つ人も
放たれる人も
楽しみ 喜びは……
こわれた共有
悲しみの共有
苦しみの共有
戦争、争いにあるのは
お互いに悲しく冷たい共有
未来のない共有
一つの玉の中に
数え切れない悲しみ
悲しみという共有が心の中をうめつくす
悲しみの共有をのりこえるには
だいじょうぶですか
わたしに手助けすることはありませんか
優しさを共有することから
はじめよう

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

我が家のハムスター

庄原市立比和中学校二年 垣内 優希

我が家には一匹のとてもかわいいハムスターがいた。
名前はアミ。

そのアミが六月十九日に亡くなった。

アミはおと年の三月に家族になった。

ペットショップのハムスターコーナーに行くと、

ほとんどのハムスターがきんちようして起きている。

しかし、その中で一匹だけ、

スヤスヤ寝ている。

ほとんどのハムスターがきんちようしているのに、

寝ていてとってもかわいかった。

だからその子を選んだ。

それがアミだった。家に帰って買ったハムスターの本を読むと、

「家に慣れるのは七日くらい、

それまではそっとしておこう」

と書いてあった。

だが、アミはなんと三日で慣れて、

家を走り回っていた。

ほくはアミのために色々なことをした。

おもちゃやエサをあげたり、

部屋をそうじしたり、アミが家に来てから

とても楽しい日が続いた。

六月の十九日に体調が悪くなった。

窓が開いて冬眠状態になってしまった。

これは人の体温で元気にもどるので、

少したつと元気になったので安心して学校へ行った。

しかし帰ってくるとアミはたおれていた。

冬眠状態になった時にどこか悪くなっていたのか。

手で温めてももうだめだった。

次の日にアミを庭にうめた。

思わず泣いてしまった。

アミ本当にありがとう。

楽しかったよと思いつつながら。

生き物にはいつかは終わりがくる。

動物を飼うときは、

その覚悟を持ち飼うこと、

アミにはこれを教えてもらった。

今が創るもの

県立広島皆実高等学校一年 高松 そら

夏休みに

物置のバスケットボールのほこりを払うと
頭の中のスクリーンが再生を始めた

蝉がうるさくて

木ごと燃やしてやりたいなんて考えながら
体育館で蒸されていたあの日

その場でドリブルをついているだけなのに
飛んでいってしまったこと

パスが怖くてキャッチできず
走って取りに行ったこと

初めて突き指してトラウマになったこと
顧問の先生が話している時に

ガリガリ君が食べたかったこと
シュートがよく入ってほめられたこと

捨てられず部屋の隅にある
くたびれたバスケットシューズを見て
また流れ出す

靴の裏がどんどん擦り切れた時

どれだけケガしても部活に出たかった時

シューズのひもを仲間とおそろいにした時

友達と朝練に向かう途中

坂から見た朝日がきれいだった時

「もう走れない」と寝っ転がって

仲間に引きずられ結局たたき起こされた時

試合中友達が変なこけ方をして

思わず笑った時

ひとつひとつが昨日のことのようで

今はもうコートを走らないはずなのに

何かが自分を満たしている

寂しくて仕方ないはずなのに

多分きつとそれは

あの瞬間が今の自分を創っているから

あきれられて悲しかったあの瞬間
部長になれなくて落ち込んだあの瞬間
初戦敗退で心にぽっかり穴が空いたあの瞬間
先輩に憧れたあの瞬間
後輩が生意気で腹が立ったあの瞬間

忘れられない瞬間ばかり

今この瞬間

未来の自分にとって忘れられないものか
未来の自分を創っているのか
今も昔もやらなきゃいけないことなんて
わからないけど
目標は大きければ大きいほど
見つけるのが簡単で
達成するのが難しい
困難だからこそ燃える人もいる
でも自分は
手元にある大切なものを
見落としてしまっていた
今それを拾いたい

現 代 詩 部 門

秋を弔い葬る

県立広島皆実高等学校二年 成藤 万葉

嫌な夜に目を覚ました

部屋に溶けていた重たい色のカーテンを押し上げる

暗闇にぼんやり浮かぶのは

冷たいアスファルト

棒立ちする電信柱

なんの印象にも残らないブロック塀

力なく枝を垂らす枯れた木

そつと息を吐き

冬の退屈さに幻滅する

布団に潜り 早く朝になればと

素晴らしい夜に目が眩んでいた

秋冷の心地よさを思い起こす

冴えた脳裏を埋めるのは
繭に包まれたような柔らかい静けさ
辺りを包む莊嚴な月明かり
慎ましくも華やかさを讃えた山々
夜を彷徨う強靱な命たち
固く目を閉じ
秋を悼む

遠い記憶の 玉響たまゆらの可惜あたらよ夜を

寒い夜に目を覚ました

眠ったままの頭が何かを求めて外を探る
滴に歪むガラスの奥には
地面を突く鋭い月光
ハラハラと落ちる六花りっか
寝起きの朦朧とした脳を刺す鮮烈な白
雪の重みに枝をしならせる木
思わず窓に手を伸ばし
けれど底冷えする

そこに命の色彩はないと知って

柔いシーツの海に溺れ 記憶を閉じる

秋を弔い 葬る

現 代 詩 部 門

ぼくを信じて

呉市立蒲刈小学校六年 望月 颯仁

ドクドク ドクドク

耳のおくでぼくをはげます

君ならやれる

颯仁なら きっと きっと

ゴールを決められる

自分を信じろ

きっとゴールを決められる

ぼくは 入れてやる

ぼくが 必ず 決めてやる

ぼくは

ぼくを 信じた

ピピーツ

ゴールキーパーと目が合う

そこだ 今

バン

右足の甲に一しゅんボールが当たった

ワー　ワァ：

みんなの声が聞こえた

ほくは

ほくを信じきった

昼の匂い

福山市立松永中学校三年 鹿野 縁

目覚めて、昼の匂いを感じます。

ばあちゃんが焼いてる卵焼き。

きつと今日も砂糖が入ってて、ちよっぴり甘い。

みかんの香りがする洗顔料。

今日はおしすぎたから妹に分けてやりました。

母さんが洗った体操服。

お風呂でふくらませるしゃぼん玉のにおい。

父さんの戸棚の本の、

庭の金木犀の、

うちの匂い。

明日もばあちゃんの卵焼きは、

ちよっぴり甘いのがいい。

現 代 詩 部 門

メツセージ

呉市立川尻中学校二年 堀 知代

その子は僕を手握って
ひらがなを書く練習中
僕が小さくなる頃には
もっと上手になるのかな
そんな僕は鉛筆だ

その子は俺を手握んで
間違えた字を消していく
俺がバラバラになってでも
最後まで使ってくれるだろうか
そんな俺は消しゴムさ

その子はぼくを手握って
真っ直ぐ線を引いていく
ぼくが目盛りがなくなっても
ぼくは役目を全うする
そんなぼくはものさしだ

その子は私を机に置いて
綺麗に文字を写して
私を使い切るときには
知識が沢山身に付くかな
そんな私はノートです

きつとみんな一生を
あなたのために過ごしたの
きつと次もこの想い
繋げていってくれるよね
そんな僕たち文房具

言の葉

県立府中高等学校二年 中川 七海

おかあさんが言っていた
五月雨がふるだろから傘を持って行けって
ぼくはなんでだろうって思った
だって六月の雨だもの

おとうさんが言っていた
気持ちの良い小春日和だねって
ぼくはなんでだろうって思った
だってまだまだ春は先だもの

おじいちゃんが言っていた
風花が少し冷たいなって
ぼくはなんでだろうって思った
だって庭の花たちは隠れているもの

おばあちゃんがぼくに言った
昔の人たちが過ぎゆく季節を恋しく思っ

つくった言葉なんだよって
だって言の葉にすると枯れないでしょうって
ぼくはもうなんでだろうと思わなかった

一般の部

入賞

広島県知事賞

島

始まりの時は
うっすらと青く
内界に結露した
母なる水球に
浮かぶ魚鱗のひとひら
朝霧は晴れ
かもめは飛び立ち
揺れる波間に
凜として湧き上がる島
もう帰ることはできない
白い灯台の立つ岬に
還って行く潮流は

三原市 長光 祐三

大きく弧を描いて
ざんぶざんぶと洗う
沖積世の岩塊の
てっぺんに刺さる
黒い銚のうた

午後の白砂青松に
ふと起こる風に巻かれて
柑橘の香り立つ島
水球の極点に裂開する
空洞の寂寥から島は来る
榊の葉 甘夏蜜柑 山の幸
沖の岩礁に残された供物が
波に浸されて
夕風の海を流れる

私は呼びかける
日没の朱筆に染まり
潮の巡りが帰還する島に
星蝕の夜に遊ぶ
海蛇の白い腹のぬめりに
深海の眠りの底の

透きとおった島の夢見に

波の間に

星が揺らめく磯を想う

私はこれから何処へ行こう

砂浜に打ち上げられた

クモヒトデを海図に這わせて

行く先を決めようか

月は潮流に直立して昇り

干満のたびに

銀河の滝が流れ落ちる島

灯台の黒い岩場に住まう

海の老婆が詠い伝える

千年の言葉を聴く

おまえ

海髪イキダスを食え

海髪イキダスを食え

【注】

海髪（イギス）＝潮間帯の岩礁または砂礫に付く暗紫色で毛髪状の海藻。海髪豆腐としてからし味噌等で食べる。

広島県議会議長賞

白い道 (2)

庄原市 奥井 久子

舗装される前の百メートル道路を

祖父と二人で歩いてきた

原爆症で入院している父を見舞うため

歩きながらの祖父の一言

「この踏んどる白い石は人の骨じゃ。」

思わず祖父に走りよったわたし

なぜだか怖かった

病院に一泊

少し回復した父が わたしと散歩すると言ふ

闇市で買っておいた紅色の革靴を

わたしに履かせたかったのだ

革靴なんて シンデレラの世界のもの

カッカツと鳴る踵にわくわくした

晩秋の朝の幽かな光が微光となって

路面を斜めに照らす

道は今朝白く淡く光って見えた
小学生のわたしにとつては 道ではなかった
殺伐とした荒野がまっすぐ続く

ザクザク ザザッ ザザッ
ザクザク ザザッ ザザッ

靴底で碎ける白い石
ストローみたいなものもある

二人は比治山の方に向かって
百メートル道路を歩いた

「白い石は人の骨だよ。」
祖父の昨日の言葉が蘇る

父はその事をわかつているにちがいない
でも父は何も言わなかった

「その靴いい色だ よく似合う。」
父はわたしの足元ばかり見て
満足そうに微笑んだ

はれやかで おだやかな父の笑顔

ザクザク ザザッ ザザッ
ザクザク ザザッ ザザッ

次の年の春 三十九才で父は逝った
燃えさかる街に入り叔母を探し続けた父

百メートル道路は平和大通りとなり
街路樹は大木となり
ヒロシマは復興した

焼け野原に一本大きな道を通した人々
今になって感銘を受けた
平和とは作っていくことかもしれない

私は忘れない
舗装の下に多くの人々の骨が
眠っていることを

ザクザク ザザッ ザザッ
ザクザク ザザッ ザザッ

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

誕生

スーパーブルームーンの前夜
お散歩中に蝉の羽化をみた
抜け殻かと思いつり過ぎたが
なにやら白く抜け光っている
柔らかく湿った、羽だった
やがて細長い六脚も見えてきた

しばらくじいと見とれていたが
様相はあまり変化しない

そのうち私はその脚に

祖父のつるんとした太ももを重ねた

白くて女人のような、とても長い脚

脛骨が左右かたち込んだから

兵隊にとられなかったと教えてくれた

出征していたら祖父は死んでいたと

パパはいないし、私もないと

幼心に私は、祖父の脛骨に手をあわせた

安芸郡坂町 石口 阿希

月明かりのもとで神秘的にうごめく蟬は
すこしだけ苦しそうにも見える
長い地球内生活から這い出して
ようやく羽ばたこうとしている
精一杯、鳴くだろう
夏の終わりになんとか間に合って
月のエネルギーに満ちたこの夜に
きみは生まれた

おなかの赤ちゃんがエールを送る
「半年後に生まれるよ。いっぱい泣くよ」
と、私のおなかで木霊こだまする

きつと明日には大空を
まだ見ぬ世界を飛び回る

こわかったでしょうこの世の中に
生まれ落ちると決意すること
勇気を出して
パパとママのところへ
舞い降りてくれてありがとう

繋がる、いのち
どこかで切れていたら
なかったはずの、このいのち

蝉は依然もぞもぞしている
私はゆつくりと、歩き出す
もうすぐ会える

愛しい我が子と向かう

パパの待つ

クーラーのきいたリビングに

現 代 詩 部 門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

誕生日

七十三回目の誕生日を迎えた

いつの頃からか 誕生日は
一年で一番大切な日 と思うようになった
あつという間に嵩を増し
大きな数字になってしまったが
気持は変わらなかった

今年の本を二冊で祝った
昨年は真ちゅうのブレスレット
一昨年は手作りのウォーターグラスひとつ
その時の自分に見合ったものを
自分で選んで 自分にプレゼントする

ある時 カレンダーを見て
途切れなく記念日や行事が押しかけてきて
踊らされているようで

廿日市市 和崎くみ子

大切にしたい日について考えさせられた
それからである

自分の誕生日を中心に
ささやかでいい祝つていこうと決めたのは

ケーキやシャンパンなどは必要なく

誰かに祝つてもらうことも期待せず

いつもと特別に変わらない日を過ごし

夜 寝る前に自分につぶやく

「また一年間よろしく」と

こんな誕生日を過ごすうち

こんな祝い方が好きになった

いくつになっても自分を産みだすようで――

今年は特別に思ったことがある

父も母も兄も見送った

墓仕舞いも済ませた

実家仕舞いも何とかやり切った

大変な労力を要し 費用もかさんだ

すると あと七年

私にはご褒美のような年月が残った

会いたい人 行きたい所 やりたいこと
に向かいあうことができる

根拠のない 漠然とした七年だが
短いかな 長いかな問題は無い

私の目の前に手つかずの時間がある
それがうれしいのだ

自分の感覚 能力 経済力に見合った
挑みができる

輝くような空白の未来を
ありがたくいただくことにした

この先 さらに年月を更新できるかどうかは
だれにもわからないこと

七十三回目の誕生日は
こうして過ぎ

また三百六十五日の船出をしたのである

現 代 詩 部 門

広島市長賞

黒ダイヤ

廿日市市 野田友里恵

陰鬱が好きです

少し暗い気分の方が好きです

ネガティブだと思いが冴える気がします
たまに、明るいものを

否定したくなってしまう――

いつからでしょうか

ポジティブな思考に

苦手意識を持つようになりました

「頼りになる」と言われれば

言葉が心まで届かなかった感覚がします

「頑張つて」と言われれば

この頑張りでは足りないのだと感じます

「ありがとう」と言われれば

お礼を言われることではないと考えます

それらはきつと

自分に自信がない表れなのかと

ポジティブな言葉を

自分の中で

身勝手に

変換

して――

ああ。

それでも暗い思考は嫌いになれません

周囲をシャットアウトして

自分自身をそつと見つめる

いろんなことを考えられる

良い意味での孤独

1人の時間は美しい――

漆黒。
しつこく。

百入茶。
ちもしおちゃ

黒紅。
くろべに。

濡羽色。
ぬれはいろ。

どれも黒味が強い色

暗いもの

それでも言葉は美しいばかり

空だつて

夜空は暗くて暗くて

全てを闇夜に閉ざしてしまふ

それでも星々は輝いていて

どこかに佇む月は

この上なく美しく

きつと光る星は自分の姿が見えていない

周りがあまりに光るから

そこばかりが見えてしまつて

世界が急に暗くなる

自分だつてこの上なく輝いているのに

ポジティブな心には

花が咲き乱れている

そしてネガティブな心には

星が輝いている

だから私は

暗いのも陰鬱なものも

好ましく思うのです——

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

波の光の幻相

三原市 末国 正志

島影重なる海を山道から見えていたときだった
胴体と同じ塊かたまりの熱に背後から突然射通され
何かがわからないものが
ずわいつとわたしから引きもがれていった

直後 眼下にうるむ海峡の小島の磯に
波はぐぐつと噛み込み

それは押し引きをゆるく繰り返すローラーだった
水にふくらんだ薄紙のようになつた島は
ローラーの力具合で破れてしまひそうだった

磯を打つ波の光は幻相げんそうになつて空に疼きうず
沖まで晴れ渡つた海の風景の重さに
押されつつ押し返しつつ抗あらかつていた
わたしからもがれていったものが
まさにそこに在あるようだった

抜け殻であるのかもしれないはずのわたしの内にも
傷口のほてりのような溼気だけが渦を巻き

抜け出たものを溼気の中に手繰り寄せて

その力がわたしを

(此処にしかないわたし)に戻した

けれどもその一部始終すべてはわたしの意識の働きではなく

わたしは何をも為せずただ山道に立ちつくしてただだけだ

その晩母に語ると

怪訝な顔をすることもなく母は言った

「わたしのお母さんが あなたに来たんじゃろう」

その出来事は 敗戦後満州からの引き上げのさなかに果てた

わたしの祖母の故郷の島のことだったのだ

それから数箇月が過ぎて

母の言葉の底意がにわかになわたしに翻った

愛娘が故国へ帰り着き大地を踏んだそのとき

最期の悲願が叶ったのを天から見届け

祖母は愛娘に永却の別れを告げるべく

母の体をまっしんに射貫いて

大地に四散したのであろうと

きつとわたしに来たようなあの烈しさで

会うこと叶かなわなかつた祖母を恋慕れんぼする
わたしの情念せいきんの堰せきがあのととき破れたのだ
死の淵ふちに立たつていたのだらうかと
あとあとまでも思おもわれるような烈はげしさで

引き上げ船ふねが出る港町みなとまちの近くまでたどり着つきながら
墓標はかばかもなく大陸たいりくの辺土へんどに未だいまだ熱い骨ほねを埋うめ
骨片ほねかただに故国ここくに眠ねることはない祖母そぼの
無念むねんとして帰かへり来きるしかない熱あつと
あのとときわたしは
祖母そぼの故郷こきやうの空そらに運はばれて
つかの間つかのままみえたのである

現 代 詩 部 門

広島市教育委員会賞

シロとサイレン

シロは兄が拾ってきた小犬
まっ白な毛なのでシロと命名
兄は自分の部屋で飼っていた
母が掃除に入ってから来る迄は、
シロの事がバレた後は
庭に犬小屋を置きシロは小屋に移住
一年もしない内に
シロは大きな犬に成長
耳はたれ、茶色の眼はキラキラ
体毛は白から茶色に変化
四肢はしなやかで速く走りそうだ
兄は高校生で帰りが遅くなった
シロの世話は私に回って来た
朝夕の餌の世話
一日一回の散歩は欠かさない事
私は学校から帰るとシロと走りま
みかん畑 野菜畑 田んぼの畦道

広島市 大木 純子

光る海辺でひと休み

貝殻を拾ったり、

波の音を聞いたり、

夕食が終ると残飯を集める

シロは音をたて、勢い良く食べる

彼には特技が二つある

一つは履物のコレクション

私のサンダル 母の下駄

父の靴 兄の運動靴 等々

不思議な事はそれぞれが片方ずつ

もしかしてと私は床下に入ってみた

田舎家の床下は高く出入可能だ

床下の土を少し掘り返す

出るわ！出るわ！ 出るわ！

サンダルに下駄や運動靴

見覚えのない靴まである

もう一つの特技は

村のサイレンと共に吠える事

村では朝昼夕に三回のサイレン

その音は高く高く響さわたる

シロは姿勢を正して吠えはじめ

そして終わる迄吠え続ける
吠え終わり身体を横たえる
あたかもひと仕事終えた人間の様に

私が中学生になった頃の事

「野犬狩りの車を見かけたよ！」

友人が教えてくれた

授業が終わり急ぎ足で帰った

物干しの柱に縛っていた鎖と首輪

ダラリと放り出されていた

いつも

学校から帰ると

飛び上って迎えてくれた

しっぽを振りふり

私の顔をよだれだらけにした

サヨナラ シロ

サヨウナラ シロ

現 代 詩 部 門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

枯露柿

老人会が公園でGゴルフを楽しんでいたなら
近所の主人が庭の鈴生りの柿を指さして
洪柿じゃが挽いでくれんか言うて来んさった
競技が終わったけえみんなで採りに行く
何ほでも言われたが遠慮して三十個貰った
家に帰ると早速女房がせつせと皮をむく
俺が二階に上がってペランダに紐で吊るした
日当たりが良いけえ干し柿にはうってつけ
女房が洗濯を終えたら 俺が乾しに上がって
柿の乾き具合を確かめることにした
三週間位経ったところで一個外して食うた
夕方洗濯物を取り込んだ女房が不思議そうに
干し柿は三十個の筈なのに二十九しかない
まさか摘み食いはしてないよね 疑われた
摘み食いはしとらんが試食したと白状
大晦日見栄え良い枯露柿を御仏前に供える
来年は早めに五十個位もろうて干そうか

広島市 玉本祈世夫

福王寺山の天辺にあかあかと輝く夕陽が沈む
今年も家族六人が除夜の鐘を聞きながら
元気で年越し蕎麦を食えれば良いが

微睡む

東広島市 天野 節子

親指のマニキュアが半分残っている
それは四か月前の事である
声楽家のお誘いでオペラに参加する
若き声楽科の学生とプロのソリストに交わり
後期高齢者もぞろぞろと楽しむ
どうも通行人のような村人らしい
されど異なる場面ではドレス着用も
半信半疑で参加する事にする
コーラスで鍛えた声で勇気を出してみる
練習が進むにつれシルバーながら
欲がみなぎる
西洋人の場面で着るドレスも吟味する
準備万端意気込んで気合いが入って来た
練習を重ねるうちに江戸時代の時代背景にいる
どうも我々は裸足らしい
藁草履も履かないなんてね

仕方がないシルバーでも指にマニキュアをする

地味にして欲しいとの事 口紅も辞める

それでもドレスの場面では前列での合唱も出来

不思議な体験を楽しみ感激の涙も湧いてきた

小オペラ「忘れられた少年」

幸せの輪の中の一人であった

青春を謳歌するシルバーである

後日動画オペラ「忘れられた少年」を見る

心は青春時代ながら

動画の中の自分の姿に感激する

映像の中の私は演技など不必要

シルバーそのもの

少し猫背な姿勢も演技では無い私なのです

ひつつめたヘアスタイルも老女そのもの

それが現実なのです

やれやれ舞台では転ばなくて良かったわ

本意でなかった裸足も私を助けたのかも

マニキュアの残る指は名残り惜しくて

除光液は使えないでいる

舞台の背景に成った自分を讃え

今後のお誘いは卒業する事とした

後期高齢者ってこうゆう事ね

これからは自分が主人公

残りの人生を大切に

夫婦仲良くのんびりと阿吽の夫とブランコで

微睡むことしよう

オペラ「忘れられた少年」に乾杯

現 代 詩 部 門

明日へ向かつて チエンジ

三次市 立田 幸子

美容師の巧みな 鉄はきみさばきで二〇センチ余りの白髪が
床へと 散つて行く

伸ばし始めて 一五年
追懐ついかいする数々の出来事

ハワイの潮風と 陽光の中 挙げた娘の結婚式

突然告げられた
夫の余命

相次いで世を去った
夫 義兄 実父
続いた愁嘆しゅうたん

「良くお似合いですよ」

美容師の声に　よみがえった現実
短髪写す鏡の中

変身した

古稀　目の前の顔が

よく耐えて来たねと・・・
微衷ひちゆうの光が

八十路の我の夕焼け小焼け

世羅郡世羅町 高本 澄江

八十歳 よくも永らえ生かされ来しものよ
父母逝き兄逝き 義父母も逝きたもう
そして、夫よ あなたまでも逝かしめぬ
我に遺されしは

田畑そして 奥地にわずかなる山林

田は今風の波に乗り 構造改善の仲間入り
巨大な田んぼに変われども

いづこが自^しが地か解るなし
図面の上にポツチリと赤い囲いが見えるのみ
秋の実りの穂は揺れど我の米にあらざるに

畑は独りの我には広すぎぬ
取っても取っても草茂り

わずかに作る夏野菜
カボチャにスイカにさつま芋
夜ごと出で来る猪が、これでもかと荒しゆく

昼は空からカラスたち
トマト、モロコシを試食する

義父母や夫の買い求めたる山林は
松茸どころか 松木も枯れて

大藪小藪ススキが繁り

人の入るを拒みいる

境を示す杭木も石も深き落ち葉の下となる
道に張り出す木の枝を

切れよ切れよと 人は騒げり口々に

八十路の迷子のこの我は

新聞チラシを広げつつ

豪華客船世界の旅 密かに夢に描けども
腰の痛みに歯の痛み 目は近くして耳遠し

思いを馳せるはただ一つ

生れ故郷の夕焼け小焼け

小さき盆の踊り唄 小さき盆の踊りの輪

狐に化けて帰ろうか

カラスになつて飛んで行こか

夕焼け小焼けの消えぬ間に

澄江よ 我にはよき人生であつたぞよ
遺影の夫は笑みおりぬ
浄土は今日はお盆だぞ
この歌声が聞こえぬか 浄土の盆の踊り唄
浄土の門で 両手を広げて待つてるぞ
お前の命の尽きなんその日まで

幾々代も守り耕し来たる土地なれど
山も畑も野に還えせ
猪、鹿の遊び場に
ハトやカラスの樂園に
コオロギ、バッタも喜ぼう

令和もコロナも知らぬ夫よ
八十路の道は険しかり
今日は三十五度もの猛暑日ぞ
太陽さえも味方せず
されどされど 明日は明日の夕焼け小焼け
明日は明日の風が吹く
それを信じて眠ろうぞ
それを信じて生きようぞ

現 代 詩 部 門

会社の温度

広島市 中村 京子

こちらから声をかける前に
話しかけてくるお客様がわかるようになった
入ってくるなり

なりふりかまわず話してくるお客様もわかる

話し相手のいないさみしいお客様は

自分の知識を喋り続けて話が終わらない

どちらにしようか迷っているお客様は

話がしたいだけ

とつくに決まっている

私の身体は熱くなったり冷たくなったり

仕事に追われていても

従業員が店内の冷房の設定温度を下げる

休憩が終って戻ってきた従業員が

寒いと設定温度を上げる

同僚の仕事が遅いと陰で不満を言う人がいて

変なものでも見るように無視する人がいる
更衣室では店長が

お気に入りの子だけ可愛がると文句を言う

誰かの目につかぬように

足手まといにならぬように

悪口は相槌を打つだけ

誰にも届かない

私の感情は会社で冷めていく

私はどこにいても

空調の温度がなじまない

川 柳

選
者

(小・中学生の部)

薔
帆
子

(高校生・一般の部)

浅
原
志
ん
洋

小
島
蘭
幸

小・中学生の部

入賞

広島県知事賞

たのしみだ走って帰るたん生日

廿日市市立佐方小学校六年 長谷川アシュリー

広島県議会議長賞

走る時みんなの声がエネルギー

大竹市立大竹小学校五年 植田 叶乃

広島県教育委員会賞

かけっこで一位ねらってこけちやつた

廿日市市立佐方小学校四年 光井 奏人

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

リレーでねバトンをつなぐはらはらだ

大竹市立小方小学校四年 海井明香里

広島市長賞

負けないでゆめに向かって走るんだ

廿日市市立佐方小学校四年 内藤 結菜

広島市議会議長賞

ときよう走ビリでもいいよチャレンジだ

大竹市立小方小学校五年 藤高穂乃香

広島市教育委員会賞

寝坊して家中走る休み明け

庄原市立比和中学校三年 永田 心結

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

ときようそうまさかの2位におちちやった

大竹市立大竹小学校四年 中村 蒼馬

題「走る」 部 帆子 選

特
選

たのしみだ走って帰るたん生日

廿日市市立佐方小学校六年 長谷川アシユリ

【評】どんなプレゼントが待っているのか。走っている姿が目に見えま
す。「たのしみだ」に思いがよく出ています。

走る時みんなの声がエネルギー

大竹市立大竹小学校五年 植田 叶乃

【評】お友達の応援、十倍も百倍も力がわいてきますね。「エネルギー」が
効いています。ワクワクします。

かけっこで一位ねらってこけちゃった

廿日市市立佐方小学校四年 光井 奏人

【評】一生懸命頑張ったのに。次はがんばれるよ。「こけちゃった」が何と
なくユーモラスで可愛い句になっています。

リレーでねバトンをつなぐはらはらだ

大竹市立小方小学校四年 海井明香里

【評】一生懸命バトンをつながなければという責任感と不安が「はらはらだ」に表れた句になっています。

負けないでゆめに向かって走るんだ

廿日市市立佐方小学校四年 内藤 結菜

【評】自分をしっかり見つけて前を向く。夢に向かって走る。自分を激励する姿がしっかり表れた句になりました。

入
選

ときよう走ビリでもいいよチャレンジだ

大竹市立小方小学校五年 藤高穂乃香

寝坊して家中走る休み明け

庄原市立比和中学校三年 永田 心結

ときようそうまさかの2位におちちゃった

大竹市立大竹小学校四年 中村 蒼馬

たいへんだちこくしちやうよ走らなきや

廿日市市立佐方小学校三年 赤まつひろき

学校のろうかをはしりおこられる

大竹市立小方小学校二年 山本いぶき

運動会テープをきると飛び上がる

大竹市立大竹小学校五年 後河内咲月

みんなでねゆめにむかって走ろうよ

大竹市立大竹小学校四年 橋下 心羽

リレーでね心と心つながった

廿日市市立佐方小学校三年 西本未花子

サッカーで走り足りないまだまだだ

大竹市立小方小学校四年 橋本 好清

かけっこでボルトみたいに走るんだ

大竹市立大竹小学校四年 小泉葵友汰

ふわふわの雲にのってね走りたい

大竹市立小方小学校五年 柴田 唯羽

シャツトルラン全力ダッシュだめだった

廿日市市立宮園小学校六年 米倉 祐貴

おにごっこ兄ちゃん早いおいつけぬ

大竹市立大竹小学校六年 佐東 琴花

マラソンで最初にダッシュユヤりすぎた

大竹市立小方小学校五年 森岡 快斗

走ろうよみんなでリレー楽しいな

大竹市立小方小学校四年 古賀 大翔

おうまがねパカパカはしるかわいいな

大竹市立玖波小学校二年 山本 紬季

アンカーだ全員ぬいてVサイン

廿日市市立吉和小学校六年 大村慧三朗

シャツトルランゴールがないよなんでだよ

大竹市立小方小学校六年 脇坂 恭伍

にじの橋とてもきれいだ走りたい

廿日市市立佐方小学校四年 菅生 湊斗

運動会母の声聞きあせりだす

大竹市立大竹小学校五年 西村 奏音

徒競走一位をとっててれくさい

大竹市立小方小学校五年 三浦 颯希

走るとき負けない気持ち大事だよ

大竹市立大竹小学校五年 川本 拓海

空見上げとりといっしょにはしりたいたい

廿日市市立佐方小学校二年 石田 千陽

速すぎる相手はすごいお手上げだ

大竹市立大竹小学校五年 吉本 碧人

あこがれの父の背に向け走る僕

庄原市立比和中学校三年 杠 航太郎

シャツトルラン息切れるほどがんばった

大竹市立大竹小学校四年 国兼 結菜

目標を立て走り出す新学期

福山市立鞆の浦学園中学校三年 原 悠祐

おにごっこタッチされては追いかける

大竹市立小方小学校六年 須本 優七

本屋さん目当ての本にダッシュする

大竹市立小方小学校五年 船原 望愛

にじがでてまじよがその上走ってる

大竹市立玖波小学校三年 梶山 晴輝

川 柳 部 門

高校生・一般の部

入賞

広島県知事賞

ヒロシマに残る火の色火の匂い

広島市 常國 喜好

広島県議会議長賞

ブランコが揺れて独りが長くなる

広島市 高東八千代

広島県教育委員会賞

花火果て夜空が星を取り戻す

庄原市 新宅 涼枝

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

喜寿青年スキップだつてまだ出来る

広島市 永井 有三

広島市長賞

燃え尽きてやさしい風を待つばかり

東広島市 佐々木昭子

広島市議会議長賞

断捨離に心の火種だけ残す

東広島市 大木 雅彦

広島市教育委員会賞

四年分の汗が滴るフェスティバル

三原市 笹重 耕三

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

核廃へ口火切れない核の傘

広島市 山根 博昭

題「火」 浅原志ん洋 選

特選

花火果て夜空が星を取り戻す

庄原市 新宅 涼枝

【評】花火大会の夜空は華やかだ。その間星は輝きを失っている。しかし、花火が終ると星は本来の光を放ち始める。

ヒロシマに残る火の色火の匂い

広島市 常國 喜好

【評】被爆者が一様に語る話がある。あの惨劇を伝えるのに言葉や映像では決して伝えられないものは匂いであると。

燃え尽きてやさしい風を待つばかり

東広島市 佐々木昭子

【評】最善は尽したつもりだ。あとは運命の女神の判断を待つだけだ。きつとやさしい風が頬をなでてくれるだろう。

断捨離に心の火種だけ残す

東広島市 大木 雅彦

【評】人生もそろそろ終盤である。煩惱を断つように身の整理をした。ただひとつ心に誰にも言えぬ火種を残して。

核廃へ口火切れない核の傘

広島市 山根 博昭

【評】最初に核の洗礼を受けた国が、なぜ核廃を言えないのか。核の傘という破れ傘からこそ出る時ではなからうか。

入
選

持て余す人が造った原子の火

福山市 村田 幸夫

火の海を語るドームの使命感

三原市 笹重 耕三

埋火をほぐし傘寿の再起動

福山市 新庄 芳春

あの世まで残り火確と抱いて行く

呉市 野高 善子

花火舞い湖面を飾る万華鏡

庄原市 古本 文子

ライバルがわたしの胸に火をつける

広島市 西永美智枝

三秒の芸術花火師が競う

広島市 川上 咲良

かがり火が燃えて鶴匠のわざが冴え

庄原市 荒木美智子

しぶしぶと妥協火種は灰の中

広島市 福田 淳子

燃えつきるまでは恋する火の女

江田島市 問可 圧子

ソロキヤンプ自我を煮詰めている焚き火

広島市 永井 有三

気紛れな正義火傷をくり返す

広島市 高東八千代

ふるさとの母のにおいと火の記憶

広島市 熊谷 純

おおごとになせない母の火消し壺

江田島市 住田 照水

護摩の火の陽炎越しに歪む顔

東広島市 香川不可止

戦場をプロメテウスの火が駆ける

三次市 新見 理恵

火に油ひとこと多いアドバイス

広島市 大杉 綾子

物価高火の車ひく弱者達

呉市 芳野 幸忠

消し壺の中で再燃する語り

福山市 高橋 泰子

残り火を静かに瀬戸に灯す老い

竹原市 室 晃二

題「自由吟」

小島 蘭幸 選

特選

ブランコが揺れて独りが長くなる

広島市 高東八千代

【評】今は元気でいいのだけれど、これからを思うと…。ブランコが微かに揺れています。

喜寿青年スキップだってまだ出来る

広島市 永井 有三

【評】喜寿青年がいいですね、齢を重ねても、まだまだ楽しいことがいっぱいあるのです。

見渡せば持っては逝けぬものばかり

広島市 常國 喜好

【評】持っては逝けないけれど、捨てられないものばかりなのです。思い出がいっぱい詰まっています。

四年分の汗が滴るフェスティバル

三原市 笹重 耕三

【評】待ちに待ったフラワーフェスティバル。歌って踊って若さが弾けます。

昭和という忘れられない玉手箱

広島市 安部 敦子

【評】一生懸命だった昭和、どの頁を開いても愛が溢れています。

入
選

アルバムを開くと玉手箱だった

広島市 大林 載孝

終活中だけど無料に弱いです

福山市 奈良木亮子

四畳半コックピットとなるくらし

福山市 早川 迷子

プラごみで竜宮城が見あたらぬ

府中市 山本 智志

病室へ笑顔練習して入る

福山市 宝諸 京子

老いてなおうた詠むこころ持ち続け

広島市 吉川 徳子

幸せです笑って食べて寝ころんで

広島市 松田 稔子

戦争もコロナも人を変えました

竹原市 土井 輝恵

死ぬるのになんで戦争するのパパ

広島市 岡田 郁枝

まあいいかなんて気楽に生き延びる

江田島市 住田 照水

大海を知らぬわたしのテリトリ

広島市 西永美智枝

天秤棒つりあい取れてきて傘寿

神戸市 新谷伸比呂

余命宣告弥陀に委ねたこの命

呉市 野高 善子

笑顔生む魔法の言葉ありがとう

尾道市 岡田 容子

半分こ出来る夫婦のままがいい

竹原市 室 晃二

父母の想い出古き表札に

竹原市 田中 敬子

ノーマスクはじめましての君の顔

広島市 若狭 綾香

仲直りできた入道雲の下

広島市 熊谷 純

七人の食事の世話が懐かしい

三次市 平野笑美子

日陰へと忍者のように移動する

広島市 塩井 綾乃

作品募集要項

■趣旨

文芸に親しむ人々から広く作品を募集し、発表、交流の機会を設けることで、文芸への理解を深め、広島県の文化を高める祭典とします。また、表彰式・分野会を行います。

■主催

けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団

■事業内容

応募のあった作品について審査を行い、入賞作品等を決定し、表彰します。

※入賞・入選された方には、大会1か月前頃に通知します。

■応募締切

令和5(2023)年9月7日(木) 必着

■応募資格

広島県内に在住している人、通勤、通学している人及び広島県出身者

■応募先・問い合わせ先

【郵送】

〒730-0051 広島市中区大手町一丁目5-3 広島県民文化センター内
公益財団法人ひろしま文化振興財団

■賞

短歌、俳句、現代詩、川柳の分野ごとに広島県知事賞・広島県議会議長賞・広島県教育委員会賞・けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞等を授与します。

■表彰式・分野会

日時：令和5(2023)年12月10日(日) 午後1時00分

場所：広島県民文化センター（広島市中区大手町一丁目5-3）

■作品集

短歌、俳句、現代詩、川柳の入賞作品等を掲載した作品集を刊行し、表彰式会場にて無料配布しますが、郵送を希望される場合は、郵便番号・住所・氏名を明記し、215円切手を貼付した角5（横19㌘×縦24㌘）以上の返信用封筒を応募先に郵送してください。

なお、応募された作品の著作権は、けんみん文化祭ひろしま実行委員会に帰属します。※全応募作品を掲載した作品集は作成しません。

短歌 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作品

未発表作品とし、一人一首とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類似作品と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県歌人協会

俳句 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作品

未発表作品とし、一人一句とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催：(公社)日本伝統俳句協会 (公社)俳人協会広島県支部 広島県現代俳句協会

現代詩 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作品

未発表作品とし、一人一編とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙、または原稿用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。本文は、原稿用紙3枚以内とします。

●その他

同一作品及び類似作品による他の文芸事業への重複応募はお断りします。応募規定に違反する場合は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県詩人協会

川柳 応募規定

●募集区分

高校生・一般の部 小・中学生の部

●作品

未発表作品とし、一人各題二句詠とします。（応募作品はお返ししません）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・暗号句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県川柳協会

けんみん文化祭ひろしま'23 文芸祭 応募状況

地区	市町	短歌		俳句		現代詩		川柳	
		一般	小・中・高	一般	小・中・高	一般	小・中・高	高校・一般	小・中
広島	広島市	79	532	119	374	15	11	101	19
西部	大竹市	0	18	0	317	0	13	2	750
	廿日市市	7	348	7	755	3	0	10	646
呉・安芸	呉市	15	100	15	194	1	13	19	0
	江田島市	1	0	9	0	1	0	3	0
	府中町	1	10	4	169	0	0	0	0
	海田町	1	45	0	390	1	45	0	0
	熊野町	0	0	0	0	0	4	1	0
	坂町	1	0	1	263	1	0	1	0
東広島	東広島市	6	113	11	150	2	15	15	0
芸北	安芸高田市	3	19	1	26	0	0	1	0
	安芸太田町	1	0	5	0	0	0	0	0
	北広島町	1	21	0	0	0	0	0	0
尾三	竹原市	4	0	7	0	0	0	10	0
	三原市	5	60	4	42	4	0	6	0
	尾道市	11	202	12	117	2	0	14	0
	大崎上島町	1	0	1	13	0	0	1	0
	世羅町	1	0	1	0	2	0	3	8
福山	福山市	15	850	51	857	1	51	30	4
	府中市	2	0	7	29	0	3	2	0
	神石高原町	0	0	0	16	0	0	0	0
備北	三次市	14	328	13	3	4	0	10	0
	庄原市	7	92	7	180	3	14	4	44
県内小計		176	2,738	275	3,895	40	169	233	1,471
県外		0	0	0	0	1	0	2	0
合計		176	2,738	275	3,895	41	169	235	1,471

けんみん文化祭ひろしま'23 文芸祭 大会記録

- 【開催日】 令和5年12月10日（日）
【場所】 広島県民文化センター
【主催】 けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団
【共催】 広島県歌人協会、(公社)日本伝統俳句協会、(公社)俳人協会広島県支部、広島県現代俳句協会、広島県詩人協会、広島県川柳協会

【プログラム】（予定）

- 表彰式（13：00～13：30）
入賞作品の発表・表彰式 等

- 分野会（13：45～15：00）
 - 短歌
各選者による講評 等
 - 俳句
各選者による講評 等
 - 現代詩
入選者の表彰、各選者による講評、入賞・入選者による作品の朗読 等
 - 川柳
各選者による講評 等

けんみん文化祭ひろしま'23 文芸祭 合同作品集

編集・発行 令和5年12月

けんみん文化祭ひろしま実行委員会
〒730-8511 広島市中区基町10-52
広島県環境県民局文化芸術課内
TEL(082)513-2722

公益財団法人ひろしま文化振興財団
〒730-0051 広島市中区大手町1-5-3
広島県民文化センター内
TEL(082)249-8385

印刷 株式会社中本店